

2023年2月の総評に代えて 高橋修宏

定食屋のテレビに映る定食屋 (郡司和斗 茨城県)

こっちでは生姜焼きを食べてるよ

一九六〇年代、テレビの普及によって変容する社会を《幻影の時代》(ブーアスティン)と名づけたアメリカの作家がいたが、この作品の情景もそんな時代を象徴するものかもしれない。しかし、この作では「生姜焼き」という具体的な食べものによって、決して《幻影》ではない生々しいリアルを書きとめている。

東京は (加藤悠 愛知県)

だなんて枕詞では
表せなかったヒトもネオンも

「東京は」の次の空白の一行が効果的。それにしても「東京」という都市は、どこまで変化しつづけるのだろうか。「東京は」という形容を振り切るように変わりつづける様相を捉えるのも、言葉の役割なのかもしれないが……。ただ今は、空白がふさわしい。

仲直りせず初雪を赤い靴 (長谷川柊香 宮城県)

七・五・五の定型律の作品。「仲直りせず」と言いさしそのまま、「初雪」への場面転換が巧み。真白な雪のなかで、ことさら目立つ「赤い靴」が作中主体の心象を語るようだ。それは、強がりか、あるいは軽い後悔なのか。

突き刺されるなら (桜咲 千葉県)

寒さが、 いい

何よりも、二行目の空白が印象的。〈突き刺すような寒さ〉という慣用句を活用しながら、

どこか現在へと通じるポエジーへと転じている。昨今のニュースのように、ナイフのような刃物で突き刺されるよりも、はるかに「寒さ」の方が「いい」はずだから。

好きだとは言えない (さいう 愛知県)
距離に落ち着いて
手持ち花火を見つめるばかり

友達以上、恋人未満という関係なのだろうか。たしかに、どっちつかずの関係は、当事者にとってつらいものかもしれない。だが、そのような関係を受け入れ、その揺れを揺れのまま記したときに、新しい言葉呼びこむこともあるはずだ。また、この作者に共通する、どこかイノセントな青春性にも魅力を感じた。

街のかたちに雪が積もる (立花ばとん 東京都)
私のかたちに雪がへこむ

「街」と「私」、そして「積もる」と「へこむ」。対句的な二行の構成でありながら、「へこむ」の一語によって謎が生まれる。ふと、三好達治の代表作〈雪〉を想い浮べた。

寝転びのねこにお願いしてみるよ (豊富 瑞歩 茨城県)
こたつの中からすべてが遠い

佳作に選んだ 5 作品とも、日常の景のようでありながら不思議な手触りが魅力的だ。なかでも上記の作は、「ねこ」という存在が前景化し、「こたつ」という日常的な事物において遠近法が歪みはじめていく。ささやかなファンタジーのようでありながら、シニカルな毒も効いている。

水仙に触れるいつかのわたしたち (藤ほたる 神奈川県)

「いつか」の一語によって、あえかな未来性を呼びこんだ一句。まだ、ここに居ない「わたしたち」とは、一体どのような主体なのか。さまざまに想像させられた作品。

もう目には見えないけれど
窓際の日向に犬が寝転んでいる
(猫谷圭希 広島県)

その「犬」を、いつも作者は目にしていたのだろう。もしや、その犬は亡くなってしまったのかもしれないけれど、いつまでも作者の中には存在しつづけている。そのことも、ひとつの〈共生〉と呼べるのかもしれない。

落椿一輪未解決事件
(氷丸 茨城県)

「落椿一輪」から「未解決事件」の飛躍が鮮やかだ。すべてを漢字表記にしたのも巧み。まず、一読して引かれた作品。

切株に痰も小雨も降ってきた
(吉沢 美香 宮城県)

「切株」と言えば、すでに佐藤鬼房〈切株があり愚直の斧があり〉が著名であるが、作者は「痰も小雨も……」と日常の景によって形象化している（なかでも、痰が気になるが…）。かつての「切株」の作に対する、作者の挨拶なのかもしれない。また、同じ作者による、いづれの作品も日常の中のズレや飛躍が魅力となっている。

地層のかたちをした僕が
駅前にゆっくり
沈む
(こはくいろ 大阪府)

何より「地層のかたちをした僕」が、面白い。おそらく私たちは、いくつもの時間の層を重ねるようにして存在しているのかもしれない。昨年も、何年前も、何十年前も、きっと、

その地層には残っているはずだから。また、「沈む」の一語が、「地層」と共震するようだ。

難しい方の「お」です、(マズルカ 山口県)
そう「を」です。
しゃがんで蟻を見てるみたいな

そもそも〈ひらがな〉は、漢字という象形文字から作られたけれども、その痕跡は殆ど残っていない。この作では、「を」という文字を視覚的な〈たとえ〉によって表現している。その「しゃがんで……」のたとえば、何ともチャーミング。

教会の像に首なく百合の花(玻璃 愛媛県)

過去の戦乱のせいかな、あるいは異教徒によるものなのか。その理由はともあれ、「首」がないことによって、その顔や表情をめぐって様々な想像をかきたてる。結句の「百合の花」が、美しい少女（あるいは少年）の面影を呼びおこすようだ。

山笑う右耳がちょっとかゆそう(にしざわゆうと 福井県)

「山笑う」は、春の季語。山の木々が、新たに芽吹きはじめる季節にふさわしい言葉だ。この作の「右耳が……」は、この言葉としての季語を踏まえ、ユーモラスに洒落のめしている。何とも愉快的な一句。